
とある道化の英雄譚(ヒーローストーリー)

未確認生物

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある道化の英雄譚^{ヒーローストーリー}

【Nコード】

N6474K

【作者名】

未確認生物

【あらすじ】

学園都市。この都市でまた動乱が起ころうとしている。舞台（科学と魔術）の準備は整い、幕は上がった。道化と英雄は踊り始め、筋書きの無い物語を進めていく。

拙いうえに更新速度はカタツムリより遅いです。誤字脱字もあるかもしれませんが、それでも良い方はご覧ください。

開幕〜エピソード〜（前書き）

お茶でも飲みながら読んでください〜

（ついで）

開幕〜エピソード〜

走る走る走る。

かーさんは俺と双子の弟と妹を連れ、獣道を走り抜け山を下りる。

親父が言っていた足止めの限界時間はとうに過ぎ、走って来た方角から風に乗って焦げ臭い臭いと煙が漂って来る。

辺りを見回すと、夜の山だというのにうっすらと木々には影が見え、その影は風に吹かれるようにゆらゆらと揺れ、まるで影が踊っているようだった。

獣道を抜け、かーさんと共に走り込んだのは山の麓に建っているボロボロの石造りの古い教会。屋根の上の十字架は何度も補修してあるし、ステンドガラスは少しくすんでいた。けれど重い扉をくぐった室内は意外ときれいで、埃が積もっていたり、カビ臭くはなかった。

かーさんが祭壇に掘られた13羽の鳩の一羽に触れると祭壇が音もなくせり上がり、大人が二人程入れるスペースが出て来た。俺に紙を握らせると、かーさんはそこに双子と共に俺を押し込め、鳩に触れた。

下がっていく祭壇。視界が狭まっていく中、見えたのはかーさんの後ろ姿。その姿は神に祈るでもなくただ一言『mundus764』⁴ そう言った。それは科学者であるかーさんには何の意味も無いはずの言葉。魔術師である親父が魂に刻み込んだ、魔法名。

『mundus764（世界は我が愛しき者達の為に）』

なんの意味も無いはずなのに、かーさんは

『零慈（れいじ）^{れいじ}、永希と華姫（はなき）をお願いね』

そう言い、振り向いて何もかもふっ切った笑顔でにっこりと俺達に笑いかけた。
それが最後。

真っ暗になった小さなスペースの中で俺達は肩を寄せ合い息を殺し、嗚咽を殺し、じっとしていた。それでも、三人の目から溢れる雫のポタポタという音は止められなかった。

後に訪れた金属が擦れるガチャガチャという音、怒声、銃声。何かを探す音、作業する音、そして遠ざかっていく音。辺りに音は無くなり、静寂が訪れた。

そのまま朝になり、祭壇から這い出るとそこには昨夜見たのと同じだった。よく見れば弾痕が埋められているのが分かるのだが、この部屋にはもつと重要なモノがない。いや、いない。

かーさんの遺体どころか血痕すらなかった。
多分親父の遺体もそうだろう。どこかで内密に処理され、闇へと葬られる。

そう思った俺は永希と華姫を連れ、かーさんに渡された紙に書いてある通りに親父の古い知人に連絡を取った。これから待つどんな苦難から大切な人を・・・大切な人の笑みを守ると。

これが神鳴零慈（かみなりれいじ）の9年前、6才のときの話だ。

開幕〜エピソード〜（後書き）

時期的には8刊の後です。誤字脱字、感想等ありましたらお気軽に
どうぞ

第一幕 零愁と愉快な仲間達 (前書き)

おつまみでも食べながらどーぞく () () 【柿ピー】

第一幕 零慈と愉快な仲間達

本日晴天なれど夢見悪し。

ここは東京の3 / 1もの広さを持ち、科学の先端に行く学園都市。学園都市の中と外では20 / 30年もの技術差があると言われ、人口の8割もが学生で占められる学生の街。

神鳴零慈は第7学区にある普通の高校に通っている。

窓枠に腰掛け、耳までの黒い短髪をいじりながら教室の中を見渡す零慈その表情はどこか浮かなかつた。

HR前の教室は大覇星祭前のためか騒がしい。もっともこのクラスはもともと騒がしい。

「どうしたん、レイじん？悩みがありそうな顔して。もしかしていきなり自宅に『許嫁です！！』とか言って美少女が押しかけて来たん！？」

「いやいや、『ご主人様！！』とか言ってロリっ子のメイドさんが来たかも知れないやー。それでレイじんは悶々とした一晚を・
・なんて羨ましい奴！！」

零慈が振り向くと、青い髪をした身長の高い学生と、金髪で金ぴかのネックレスをつけた男子学生達がなにやらニヤニヤしながら零慈を見ていた。

「青ピと土御門か・・・気にすんな。夢見が悪かったただけだ。つか、なぜそんな方向に話が飛ぶ？」

青ピ（青髪ピアス。本名は分からない）と呼ばれた大きな生徒は。

「あーレイじん、ほんまにダメやねえ。いつもなら『俺はロリっ子許嫁のがいい!!』』とか言ってる絡むとこやのに。ねーツッチー」

「ほんとだぜよ。マジでダメなら保健室にでも行くぜよ?」

ツッチー。もとい土御門元春と青髪ピアスはこんな口調だがホントに心配してくれているのだろう。こんな外見をしながらも憎めず、友人をやっているのは彼らの根が良いからだと言慈は常々思っていた。

ならば、夢見が悪かった程度でそんな彼らを心配させるのも悪い。そう思った零慈は、ここにいない事に気付いた人物の話題に変えた。

「そついや上条は?」

「さあ?まだ教室にいないとこを見るといつもの如く、また会ってるんやろなあ」

「みただぜよ。カミちゃん、今日はどんな目にあってるかにやー?」

会ってると言っても、人じゃない。『上条当麻』彼が会うのは不幸。

上条は生粋の不幸体質なのだ。どれくらいかと言うと、彼がいる場所だけスプリンクラーが誤作動したり、欲しい物は直前で終わり、豪勢な夕食にしようとファミレスに行けばウェイトレスさんが転んで注文した料理を頭から被るetc。こうした事が確実に一日三回はある程の不幸体質の持ち主なのだ。

しかし、これだけで終われば『不幸だねー』で終わるのだが、上条の場合、スプリンクラーが誤作動すれば近くにいた女子の服が透

け、欲しいものが直前で終われば女子が『一緒にどうですか?』とか言い寄り、飯を被れば転んだウエイトレスさんが懇切丁寧に拭いてくれて大きな胸が顔に当たったりetc。しかも全部美女美少女の部類で、そこから無意識でフラグを立てちゃったりだとか・・・そんなこんなで上条の通称は『駄フラグ建てボーイ』『フラグー級建築士』そしてフラグが立てられるのを『カミヤン病』『カミジヨー伝説』というのがこのクラスでの常識なのだった。そんな事を思っているとガラガラと教室の扉が開き、

「噂をすれば。遅かったな上条」

ツンツン頭の少年が全身泥だらけになりながら教室に入ってきた。が、誰も騒がないのを見るにこれはもう恒例のようだ。

「にやーカミヤン。やつぱり『また』なんかあったんぜよ?」

「今日はどんなや?女の子が空から降ってきたんか!?それとも、曲がり角で女の子とぶつかったんか!?!」

土御門と青髪ピアスがニヤニヤとカミヤンと呼ばれた少年に近づいていく。ツンツン頭の少年、彼が先ほどまで話題に上っていた上条当麻だ

「犬が小学生を威嚇して困ってたん助けたんですよ、上条さんは!?!つか青ピ!んなベタバタあったまるか!?!」

「で、その泥だらけは犬に追いかけてこけて、偶然、道路工事してたところに突っ込んだと」

零慈は上条の行動をただ感で言ったに過ぎないのだが、上条が目

を見開いて驚いている

「何故分かった！？零慈さんは一部始終を見ておられたのでせうか？！それとも透視能力か予知能力にでも目覚められたんで！？」

「はあ、感で言つて当たるだけ、それもベタなんだよ」

呆れた溜息を吐きながら零慈がそう言つたとガツクリと肩を落とし、こちらも溜息を吐くベタ少年上条。そんな当麻を見て含み笑いする零慈に、土御門と青髪ピアスは大笑いしている。

そんななか、教室の扉がガラガラと音を立てて開くと、身長が130センチ程度しかない女の子が入つて来た。大抵の生徒達が慌てて自分の席につく。

「あー今日も小萌センサーはかわええなあ！！」

青髪ピアスは鼻の下を伸ばし、デレつとした表情で小萌先生と呼ばれた女の子を見ていた。

彼女の名前は月詠小萌。この1年7組の担任で、これでもれっきとした大人の女性だったりする。しかしその幼すぎる見た目に反し、とても面倒見がよく、正義感も強い先生で容姿と相まって生徒からの人気は高い。しかし、これまた容姿のせいで学園都市の七不思議に入つていたりする。

「はい神鳴ちゃんと上条ちゃんは席に着いてくださいねー」

小萌先生はそう言つとパンパと手を叩いて零慈と当麻に席に着くように促す。

甘つたるいロリータボイス。彼女の声は、ヘビースモーカーで酒豪なのに声が嗄れ（かすれ）ない。これも七不思議の所以のひとつだ

零慈はそう思いながらも席に着き、鞆から筆箱を出す。そうすると小萌先生が今日の連絡を言い始めた。

「ですから、今日は個別のカリキュラムを受けて貰います。あくまでこれはテストケースですので」

「カリキュラムか・・・」

零慈は外を見ながら小さく呟いた。

カリキュラム。それは学園都市独自の技術によって作られた、いわば超能力者を創るレシピだ。味覚、聴覚、嗅覚、触覚、視覚の五感を刺激したり投薬や生態刺激を行ったりする事によって、意図的にある種の障害を負わせることで能力を開花させる。

この学園都市のもう一つの顔は『一大能力開発機関』ということんでもないものである。

このカリキュラムを受ければ誰でも能力を開花させる事が出来るといわれる。

零慈の様な魔術師でも例外ではない。

魔術師。ファンタジックだが、魔術は存在し、それを使う者達もまとめる者達もいる。いくつもの宗派、派閥、グループが存在し、扱う術式も個々によって異なる場合が多く、決して少なくない魔術師が日夜世界の裏側で暗躍しているのだ。

しかしながら、零慈は既に魔術師ではない。何故かと言うと、学園都市のカリキュラムを受けたからだ。魔術師と能力者は脳の回路自体が違う、魔術師が能力者になると回路が強制的に切り替えられ、そして能力者が魔術を使用すると、切り替えが行えず体内から破壊され最悪死に至る。

まあ、幾つかの裏技が無いではないが、それも体にかかる負担は大きい。

何故零慈が魔術を捨て能力者になったか、それは今は割愛するとする。

「ちゃん！神鳴ちゃん！！」

「ほへ？」

零慈が気の抜けた声を出しながら振り向くと、小萌先生が悲しそうな顔でこっちを見ていた。ついでにクラス中の注目も集めていた。

「神鳴ちゃん！！しっかり聞いててください！後、放課後職員室に来てください！！お話があります！！」

零慈が（自業自得か・・・）と思いながら少し視線を小萌先生から離しふと隣を向くと、青髪ピアスがこちらを見ていた。いや、睨んでいた。その視線からは、『うらやましーなあー妬ましいなあ』といったある種の呪詛が読み取れる。相変わらずの悪友に溜息を吐きながらも、今日は進んで行く。

夕暮れ時。零慈は小萌先生にきつちりしぼられ、帰路についた。一時間も熱心に説教してくれたおかげで何かに目覚めかけたのは秘密だ。

「さて、何か食いもんでも買って帰るかなあ」

そう呟いてコンビニに行こうと歩いているとき、

「不幸だあああああ！！！！」

聞きなれたセリフと声が聞こえて来た。と思っただけで脇をドッ
プラー効果よろしく高速で走りぬけて行く上条。
そして。

「まちやがれ!!」 「逃げんな!!」

「止まらな!!」 「止まらな!!」

「ごらあ!!」 「落とさな!!」

追ってくる、いかにも不良ですといった風なお兄さん4人組み。

「またか・・・はあ、見たからには助けにや後味悪いよなあ」

そう言っただけで溜息を吐きながらも零慈は上条達が走って行った方に
走って行き、追いかけてこに加わった。

上条達を追いかけて行ったら時折上条が『ビリビリ』と呼んでい
る女子に絡まれると言っていた鉄橋にまで来ていた。しかも、もう
辺りは真つ暗で上条は橋桁はしげたに追いつめられ、不良達に囲まれている。
零慈は息を整え、改めて上条を取り囲む不良達を見てみると4人
から十数人に増えている。彼らの手にはある者は鉄パイプを握り、
ある者はナイフを握り、ある者は拳を握りといった風に様々だった
が、一様に肩で息をしている。

零慈がこの状況からどう上条を助けて逃げ出すかと悩み始めたそ
の瞬間、不良の一人が何か言いながら拳を振り上げた。

「ちい!しゃないか!!」

零慈が走りだす。

上条は追いつめられながらも事の始まりを思い出していた。

缶詰の特売に出会った上条が、保存食として大量に買い込むのは特殊な食事情の為仕方なかっただろう。そして、買った事に喜んで缶詰の入ったスーパールの袋を少し大きく振ってしまうのも仕方なかった。が、上条は缶詰という物は金属製で重いというのを失念していた。重さに耐えきれなくなったビニール袋は限界をむかえ破けた。飛んで行った缶詰は、そのまま地面にぶちまけられ、偶然、パチンコですった不良集団の足元に転がって行き。これまた偶然、全員が缶詰をふんづけすつ転んだ。そして、辺りを見回した不良達は破れたビニール袋を持ちながら頬をひくひくさせている上条を見つけた。

そうしてデスレース（おいかけっこ）が始まったのだが、彼らは第七学区のこの辺りを根城にし、地理に詳しいのが災いし、しかも仲間に連絡を取って数を増やしたため、いつもの様に不良達を振り切れなかった。

「くそ・・・」

ジリジリと寄って来る不良達。背後にはコンクリートで固められた橋桁。逃げ場はない。

「梃子摺らせてくれたな。落とし前はきっちりつけさせてもらうぜ！・・・」

そう言つと不良A（仮）が拳を握り、上条の顔面に向かって打ち出した。

(くそー！避けねえー！)

そう思ってグツと目を瞑り、腕でガードしようとするど、

ゴウ！「くびペ！？」ドカン！！カランカラン

風を切る音と変な声。続いて何か背後の壁にぶつかった音がした。衝撃はいつまでたっても来なかった。恐る恐る目を開け、辺りを見回すと橋桁にぶつかって拳を握った

男がいた。その顔は見覚えがあるどころかつい2時間程前まで一緒にいた人物。

「零慈！？」

「はあ・・・上条。いつもの様に面白い事になってんな」

零慈は溜息を吐くと、拳を握り直し。

「とりあえずお礼は3日分の昼飯・・・な！」

そう言つて、乱入者と突然仲間が飛んで行った事に啞然としている不良の一人の腹をぶん殴った。

「ごひゅー！」ズサアアアアア

肺から空気を絞り出され、先ほどの不良と同じように変な声を出した後、石だらけの地面を滑って行く不良。力無く、倒れこんでいることから、誰の目から見ても気絶している事は明らかだ。

不良達は気付いたこの男は敵で、潰さなければいけない存在だと。

拳を握り、鉄パイプを大きく振りかぶっていた不良の顎に叩きこむ。後ろ向きに倒れるその不良を蹴り飛ばし、そいつの後ろにいた二人を巻き込ませる。そいつらが落とした鉄パイプを拾い上げ、ナイフを持って突っ込んで来た奴の頭を横薙ぎにぶん殴る。

不良の数は多い。しかし、先ほどまで上条とおいかけてこしているうえ、一人一人の力は所詮素人で、能力を使わないところを見ると全員無能力者か低能力。

(楽勝だな)

そんな過信が隙を生んだ。10人程ぶつ飛ばしたときだった、零慈の握る鉄パイプは歪み、血も付いていた。これは零慈の血ではなく、ぶつ飛ばした不良達の血だ。そんな鉄パイプを振るおうとしたときに倒れている一人が零慈の足と鉄パイプを掴んだ。

その一瞬、気を取られた。

不良の怒りが込められ振り下ろされるナイフ。しまったと思っても遅い。近づく凶刃。鉄パイプで受けようにも掴むのを振り切っていては間に合わない。

(!?!?!?!はあ、しくったなあ)

そう思った刹那、不良の顔面が殴られた。ガラリと音を立てて落ちるナイフ、倒れる不良。視線を拳が飛んで来た方に向けると上条が右手の拳を握っていた。

「上条」

「お前なあ！勝手に出てきて勝手に終わらせようとしてんじゃねーよ！つか、昼飯3日分とか上条さんのお財布をカラにするおつもりですか!？」

そう言っつて上条は再度拳を握り。残り数人になった不良達に体を向けると、

「あーもうこいつら片付けるぞ零慈！終わったら何かおごっちゃうー！」

やけくそ気味に言った。少し虚を突かれたような表情をした零慈は、はあと溜息を吐き

「せめて美味しいもん頼むな。ヤシの実サイダー抹茶味とかは嫌だからな」

掴まれていない足の踵で、掴んでいた不良の顔面を蹴り飛ばし気絶させ、鉄パイプを構えた。それを見て相変わらず突っ込んでくる不良達。

突き出されたナイフを弾き、鉄パイプを防ぎ、拳を打ち返す零慈。その際に不良達の顔面を顎を腹を殴って、気絶又は一時的に動けなくさせる上条。

息の合ったコンビプレー。互いが互いを信じているからこそこのコンビネーション。

数後、不良達は全員気絶、あるいは戦闘不能になって倒れていた。

第一幕 零慈と愉快な仲間達 (後書き)

書いてて一瞬、上条がヒロインぽくなって焦ったWWW
やっぱ小説って難しいねー

第二幕 白の修道女（爆食シスター）（前書き）

あっお茶のおかわりいりますか？<）
（つつ旦

第二幕 白の修道女（爆食シスター）

とりあえず倒した連中には、救急車とアンチスキルと呼ばれる教師で構成される治安維持機関を呼んでおいた。流石に放置しておくのもまずいし、零慈はうまく殴ったが頭なんかを殴ってしまったため万が一の事がないようにだ。

まあ、そのおかげで零慈と上条の学校の教師兼アンチスキルの黄泉川愛穂という女教師に特大の雷を落とされたが。それは至極当然である。何せ、たった二人で十数人と喧嘩をしたのだ、下手をすればリンチにあつて大怪我していたかも知れない。

そんなこんなで小一時間程お説教を受けた二人は、被害者という立場の温情と正当防衛という事でお説教と事情聴取で済み、改めて帰路についていた。

「終わった終わった」

零慈はそう言って背伸びして自分の肩をトントンと年寄り臭く叩いた。

「巻き込みまわって悪いな零慈」

バツが悪そうに、言う上条。零慈はそんな上条に、

「はあ、あのな、おいかけっこを俺が見かけて、参加しただけだ。上条が気にすることは無い。上条は俺に何かしら奢れば言いだけだ」

そう言ってニヤリと笑いかけた。それを聞くと上条は思い出したように、近くの自販機の前に立ち、

「そついやそつだな。で、何が良い？缶ジュースくらいなら奢るぜ」

ガサガサとポケットを漁る上条。そしてポケットから財布を取り出すと、それに引っかけかけてポロリと落ちた物があった。それは破れた近くのスーパーのビニール袋。それを拾う上条の顔がサーと青くなった。

何故、自分が袋が破ける程の缶詰を買ったか、その元凶であることを存在ここ2時間程忘れていた。

慌ててケータイの時計を確認する上条。ぶちまけた缶詰は今頃掃除口ボが綺麗に片づけているだろう。そして、今の所持金は缶ジュース二本買うのがやっと、コンビニ弁当すら買えない。

「どうした上条？また厄介事みたいだが・・・？」

青ざめていく上条を不思議に感じながら、零慈は少し心配そうに声をかける。だが、上条には聞えていない。ガタガタ震え、

「すまん零慈！！上条さんは急いで帰らなければ今世紀最大の命の危機を迎える！！てか戻っても無駄かも知れんが行かんよりましだ！！あつ！！これで適当にジュースでも買ってくれ、じゃな！！」

そう言つて財布を零慈に渡し、猛スピードで走って行ってしまった。

「はあ？何だつてんだよ。つか財布ごと押しつけられても困るんだがな・・・」

財布を見ると学生証から様々なカードと数枚の硬貨。流石にこれ
を自分が持っている訳にはいかない。そう考えた零慈は、学生証の
住所を見て一路、上条宅に歩みを進めるのであった。

上条の住む寮は意外と早く見つかった。近かったのもあるが、住
所を聞いた近所の学生が、

「ああ、あるときどき騒がしい寮ね」

などと言っていた。この辺りではそこそこ有名な寮のようだ。何
せ、その学生が話すには。

曰く、シスターや巫女さん果てはメイドが時折出入りしている

曰く、常盤台中学の制服を着たクールそうな女子が入って行った

曰く、それらを連れ込む伝説の男ならぬ漢がいる

曰く、時折断末魔の様な叫び声が聞こえる

などなど、話題には事欠かない場所の様である。まあ、多分大抵
の話はあの『フラグ一級建築士』と呼ばれる悪友のせいであろうと
いう事は、零慈には分かった。

「なにしてんだかあのバカは・・・」

呆れながら寮に足を踏み入れる。7階に上り、学生証に書かれた

部屋番と確認しながら進む。書かれた番号と同じ部屋番を見つけ、表札を確認すると【上条】そう書かれている。間違いなかった。しかも隣の部屋の表札には【土御門】そう書かれている。

（はあ、土御門も同じ寮か・・・て、事は寮に出入りしてるメイドってアイツの妹か）

ひとつ、この寮の噂が解明できた。そう思いながらチャイムを押しそうとするど、

「ぎゃあああああああああああ！！！」

上条の部屋の中から断末魔の様な声が聞えて来た。零慈は、何事かと考える前に体が動き、ドアを開け放った。幸い、鍵はかかっておらず、すんなりドアは開いた。

「上条！！！」

靴を脱ぐのも忘れ、土足で室内に突入する。見たのはダイニングで悶絶している上条と上条の頭にかぶりついている白い修道服を着た銀髪の少女。零慈はその少女を知っていた。いや、魔術師ならば誰でも知っているであろう少女。

「インデックス?!」

少し前、零慈は自身の保護者に連れられて行った必要悪の教会とネセサリウスいう魔術結社の本部で、楽しそうに笑いながら訪ねて行った神裂火織という少女と、ステイル＝マグヌスという少年とはしゃいでいた

白い修道女は変わりなくそこにいた。

「はあ、で、何だつて？年端もいかぬ少女と一つ屋根の下、一緒に暮らし、寝食をともにしていると。そうだと言うのか上条当麻君？」

零慈はダイニングの椅子に座り、何故インデックスがいるのかを上条に問い詰めていた。とうのインデックスはツルツルとどんぶりに入った即席ラーメンをおいしそうに食べている。

「だからな、いろいろあってやんごとなき事情がありました、インデックスをここにおいてると上条さんは言っておるんですが。後、寝るときは別だし、食事はこの暴饮暴食シスターにほとんど食われてると反論したい！！」

「む、とうま。わたしはそんなんじゃないかも。わたしはただちよつと他の人より食べる量が多いだけだよ」

「インデックスさん。一週間分の食料をたった2日で食いつくしてるあなたはちよつとどころじゃありません！てか、オマエが来る前と後の家計簿のを見比べるとあきらかにエンゲル係数が大幅にあがってんだよ！！」

「えんげるけーすー？」

「ああ！！もうどうしてくれましょうかこのシスターは！」

話が大幅に逸れ、取り返しがつかなくなりそうなので二人の言葉の応酬を遮り、

「わかったわかった。だから落ち着け上条、インデックス。かな

りの驚きだが、とりあえずは上条がインデックスの今の管理者保護者なんだな？」

そう零慈が言うと、上条は頷き。

「まあ、そうなるな。てか驚いたのはこっちだ。インデックスを知ってるって事は・・・零慈、お前は魔術師なのか？」

少し空気が変わる。零慈が魔術師なら、インデックスを狙って何かしらのアクションを起こすかも知れない。そうした考えが浮かび、自然と上条のまとう空気が変わったのだ。

しかし、零慈は、

「大丈夫だ、上条が考えてるような事は起こさんよ。確かに俺は元魔術師だ。だけど、俺はちと特殊でな・・・まあそこらは、インデックス、めんどいんで解説頼む」

そういつて話をインデックスにふる零慈。そしてインデックスは解説を始めた。

「この人の所属は無いんだよとうま」

「ない？どういう事だ？」

「極少数の宗派としては存在してるけど、教会の所属じゃないの。というか入れてもらえない。そのくせ、あらゆる教会が欲しがってるから下手に手を出せないの」

「???????余計分からんぞ欲しがってるならなんで引きいれな
いんだ？」

そう上条が聞くと、インデックスは少し戸惑いながら口を開いた。

「忌み嫌われているからだよとーま。神鳴零慈。この人はその世界で最も忌み嫌われ、禁忌とされる宗派。ユダ派^{せい}誓十字教を率いているんだから」

第二幕 白の修道女（爆食シスター）（後書き）

インデックスは登場。つかこの小説説明長いなWWW

第三幕 偶然と必然 (前書き)

お茶のおかわりいかがですか？<

> っ旦

第三幕　偶然と必然

イスカリオテのユダ。それは世界でもっとも有名でもっとも大罪を犯した人物として名が知られている。彼はイエス・キリストの弟子でありながらキリストを裏切り、数枚の銀貨と引き換えに役人に引き渡した人物として聖書に刻まれている。

そんな彼をもっとも敬虔なる使徒と信じ、彼亡き後にそう信じた者達が集まってできたのがユダ派誓十字教。

だが、彼らの道は険しかった。聖書に記載された言葉を信じる者達にとつて、ユダは許されない悪であり、それを信じる彼らは異端者だった。ユダ派は、行く先々で様々な者達に罵倒され、軽蔑され、弾圧され、そうして一所に留まらず世界各地を回ったのだった。

「なんか、天草式と似てるな」

インデックスの説明を聞いた上条が思った事だった。

天草式凄十字教。日本で弾圧されたクリシタンが作ったものだ。

余談だが、先ほど少し出て来た神裂火織という少女がそのトップだっったりする。

「うん。でも天草式が徹底した『隠蔽』に特化してるならユダ派は『戦闘』に特化してるんだよ」

「戦闘？」

「そう。戦闘。そして、独自に作られた即効性、応用性のある術

式は、どんな術式よりも速く、応用の幅が広いの。後、いろいろなところに技術を提供したりして『煙たいけど利用価値がある』状態を作ってるから、どこかから狙われてもどこがを守る状況なんだよ。それ故、どこの魔術結社も欲しがってるんだけどね」

「ふーん。ん？でも、なんでそれがインデックスを狙わない理由になるんだ？技術を提供したりしているなら、その知識の宝庫を狙わないんだ？」

「それはね、わたしに手を出すとそのバランスが崩れちゃうんだよ。わたしは良くも悪くも10万3000冊もの魔導書を有している。そんな存在が異端視されている者達に渡ったら？脅威以外の何物でもないんだよ？そうしたらどんなに技術を提供してもいらぬ反感を買って、本格的に世界の敵にされちゃうんだよ。だから手は出さない、出せない。まあ、自棄になってたり、それすら分からないマヌケなら話は別だけどね」

インデックスは、井に残ったスープをズズズと飲みながら零慈を一瞥した。

「安心しろ。俺はボンクラでもないし、自棄になる必要もないよ」

苦笑しつつそんな答えた。そして、零慈は変わらないなと思った。

魔術について分からない事は無い魔術の集大成の集大成。禁書目録。そのくせ、科学や機械にはめっぼう弱く（これは他の一部魔術師にも言える事だが）周りに笑みをもたらす白い修道女。

一年おきに記憶を失うという枷に囚われていたが、この夏にその呪縛から放たれ、学園都市の協力者に引き取られたと悪友兼情報屋

兼多重スパイに聞いていた。そして、その協力者が様々な事件を解決したとも聞いていた、が。それがこの上条だったとは聞いていなかった。

(はあ、後で話しをきつちり聞いとくか)

ついでに何かオシオキもしておくかと考える零慈。
そんなとき、零慈の携帯が鳴った。

「ああ、すまん」

一言二人に詫びを入れ、席を立って部屋の隅で電話に出る。インデックスと上条は静かにしている。

「もしもし？」

『兄さん！今どこに　ブチ』

相手の声が聴こえ、判断がついた瞬間通話を切った。そのまま携帯の時計を確認すと。

11時58分

既に今日は昨日になりかけていた。そう言えば、今日は双子達と食事に行く約束ではなかったか。特に妹は楽しみにしていたはずだ。なかなか予約が取れなく、やっと取れたと喜んでいた姿を思い出す。あれだけ楽しみにしていたのだ、この後自宅に帰ると待つのは『地獄のオシオキ』煉獄編』か死かの二つ。

帰らず止めてもらおうと思った時にこんどはメールが来た。送り

主は妹。

『from:華姫 帰ってこないと生きてる事を苦痛にしてあげるよお兄ちゃん?』

ハートマークにこれ程殺意をと絶望を覚えたのは産まれて初めてだ。

顔色は蒼白を通り越して血の気がない。体は震えることなく恐怖で固まる。

「……………インデックス」

「なにれいじ?」

「祈らせて。せめて生き残れるように」

「零慈、お前になにがあった」

不思議そうな顔をする上条とインデックスだった。

訳を話して上条宅を後にした零慈は能力を使用し大急ぎで帰宅していた。

零慈の能力。それは、『オーダーパワー身体操作』微弱な電流で刺激することで身体能力を上げる事が出来る。この能力をつかって、先の喧嘩も相手の動きを避け、防ぎ、強烈な一撃を喰らわせていた。零慈のレベルは強能力者(レベル3)

() 『日常生活において活用可能で、便利と感じられる力』か、確

かに便利だよな)

能力者のレベル分けにおける定義。

超能力者(レベル5) 単独で軍隊と戦える程の力。

大能力者(レベル4) 軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

強能力者(レベル3) 日常生活において活用可能で、便利と感じられる力。

異能力者(レベル2) 低能力者(レベル1)とほとんど変わらない程度の力。

低能力者(レベル1) スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力。

無能力者(レベル0) 測定不能や効果の薄い力。

土御門と上条はレベル0。しかし、上条は他のレベル0とは違う。前に上条自身から聞いた右手の能力、『幻想殺し(イマジンプレイカー)』。全ての異能を問答無用善悪関係なく打ち消す力。それが例え神様の力でも・・・そんな能力を持つ上条とあのインデックスが共にいる。

(偶然・・・ではないよな)

そんな事を考えながら走っていると、自宅に着いていた。15階建マンション。その一階に零慈達の家がある。何故15階建のくせ

に一階か。それは後に語るとする。

ドアの前に立つと、喉が渴いて痛い。目が霞み、足が動かない。生物の本能が『ここから逃げる』と鐘をかち割るんじゃないかと思うほどに警鐘を鳴らす。

それでもゆっくりと鍵を開け、ドアノブを握ろうとすると。

バン！ゴン！！「がッ!？」

玄関が突然開き、顔面にぶつかる。そして顔面を押さえ、悶える零慈。

「兄さん!!遅い!!アタシが呼んだら5秒以内にアタシの眼前で土下座して足を舐めろって言ってるでしょ!!」

それを罵倒で迎えるのは、栗色の長髪で白のワイシャツ、黒のミニスカート、これまた黒のニソックスを着た少女、彼女は零慈の義妹で双子の姉の『神鳴華姫』^{はなな}きつつい性格の持ち主だ。

「華姫・・・お兄ちゃんはいつももう少しおしとやかになつてくれと言つてたはずだが・・・後、そんなことは一度たりと聞いた事が無い」

華姫はそう言うのを無視して、零慈の首根っこを掴んで部屋に連れ込む。

隣の部屋と繋がるダイニングには4人掛けのテーブル。隣の部屋は広く、数人で座れるソファとガラスのテーブル。大きなテレビがあった。こちら栗色の髪で短髪。白のワイシャツ黒いネクタイ、黒のスーツボン姿の少年が、コーヒーを啜りながら一人でソファ

ーに座り、テレビを見ていた。その少年が零慈と華姫の方を見ると口を開いた。

「おかえり兄さん。夕食は準備して冷蔵庫の中だから、華姫のお説教聞いてから温めて食べてくださいね？」

「永希・・・助ける」というコマンドは無いのか？お兄ちゃん
の危機だぞ？」

少年の名前は『神鳴永希』零慈の義弟で双子の弟。しっかりとした性格の持ち主だ。

「ボクは、そんな死に急ぐ真似はしませんよ。というか、今日はボクも少し怒ってるですよ？まったく、苦労して取った予約をパーにして、こんな遅くに帰ってきて・・・少しは反省してくださいね？」

どうやら、永希も怒っている様だ。零慈には味方はいない。そうして、3度目の説教を受けてる零慈だった。

零慈は1時過ぎになって、ダイニングで温めた晩飯を食いながらやっと今日あった事を話す事が出来た。今晚のメニューはさんまの塩焼き、みそ汁に玄米ご飯といった典型的な日本食だ。

「へえー。兄さんの友達の上条って人と一緒にいるんだ禁書目録」

「しかし、何故土御門さんは何故その事を教えてくれなかったんでしょうか？もしかして兄さん、情報領ケチりました？」

「はあ、誰がケチるか。きちつと色も付けて正しい情報を流してもらえる様にしてるよ。まあ、アイツなりに考えた結果か・・・それか」

話を途切れさせ、さんまの腸わたをきれいに取りだすと

「腹んなか真つ黒な上の連中が指示してたかだな」

そう言っつて食事を再開する零慈。

「厄介な事にならなければ良いんですけど・・・とりあえず、これからは少し注意しておきましょうね」

永希は飲みかけのコーヒーを飲み干すと、立ちあがりそう言った。

「そうね。アタシの方でもいろいろと探りを入れて、上の動向に気をつけておくわ」

華姫も立ち上がり、部屋を出ようとしている永希について行く。

「俺が言つのもあれだが、あんまり無茶はするなよ？」

「分かってますよ。それじゃ兄さん。おやすみなさい」

「おやすみー」

そう言っつて部屋を出てそれぞれの部屋に戻って行く二人。それを見送ると零慈はお茶で一服し、空になった食器を水につけると電気を消して自分の部屋に引っ込んだ。そして、学ランを脱ぎ捨てると、

勉強机にあるノートパソコン起動させ、メールをチェックし始めた。

「さて・・・特に連絡は無しか」

そう呟くと、パソコンの電源を落とし、カーテンと窓を開ける。

ほのかな月明かりが、光に満ち満ちた学園都市を照らす。カーテンを僅かになびかせ吹き込む夜風が少し肌寒い。

月を見上げながら、ズボンのポケットに隠していた煙草を取り出し、100円ライターで火を付ける。一口吸い、吐き出した煙は風に踊らされ、やがて消える。

（上条にインデックス。二人がかかわった事件。偶然でないなら必然。必然ならば道筋を作れば操れる。俺が、上条とインデックスに出会ったのも必然なら、誰かが作ったシナリオなら・・・俺も、手の上で踊らされている？）

長くなった灰を灰皿に落とす。学園都市の静かな夜。街の裏側では、世界の裏では、今この瞬間も誰かの手の上で踊らされる者がいるのだろう。昔の自分の様に・・・。

「まあ、とりあえず今は踊ろう。もし、まずくなれば、手のひら（舞台）から下りるか、ストーリーを変えてやる」

根元まで吸った煙草を灰皿に押しつけて火を消し、窓とカーテンを閉める。そうして、布団に入り込み、夢の中に落ちて行く。

第三幕 偶然と必然 (後書き)

未確認生物 (以下生物) 「後書きコーナー！パチパチパチ」

零慈 「いきなり何してんだよ。てか、パチパチとか口で言うなよ」

生物 「いいだる主人公。そうでもしなきゃ場がさみしーぞ？生物泣いちゃうよ？」

零慈 「隅っこで一人で泣いてなさい。そもそも、なぜ突然にこんなコーナーが？」

生物 「いやあ、他の作家さんがいろいろやって面白そうだからノリでやってみました！」

零慈 「はあ、ノリでって・・・昔からノリしかないくせに。お前はアニメイトで立ち読みしたマンガが面白かったからって部活作ったり、人生の分岐路に立つと面白そうな方に行くような奴だろ？」

生物 「悪いか！！」

零慈 「悪くないけど威張るな。てか、小説グダグダ過ぎないか？なんか原作ファンに喧嘩を売ってるような・・・」

生物 「大丈夫！！禁書目録のファンには寛大な心を持つ人が多い・・・と思うと気が楽だ！！」

零慈 「ダメだこの作者！！」

生物「まあ、冗談抜きグダグダなのはその時の思いつきで書いてるからだね。すつごく大まかな流れだけ考えて、後はその場の思いつきとか、他の作品を呼んでいいなと思った話しの流れ方を真似てみたりしてるから」

零慈「・・・そんなんで続くのかこの小説」

生物「・・・・・・・・・・・・・・・・」

零慈「黙るなよ!？」

生物「大丈夫!!今のところはまだネタが出てくるから!!」

零慈「読者様に迷惑かけるなよ?」

生物「そりゃあもう!!」

零慈「ではみなさん。こんな作者ですが、長い目と根気でみてやってください」

生物「ではでは、みなさま、またお会いしましょう!!」

間幕（前書き）

最近バイトが忙しい）；
（

間幕

r e v e r s e s i d e

『ではその様に。博士、おやすみなさい』

通信端末からの音声は切れ、博士と呼ばれた30代程の男はデスクに戻った。

「ふむ・・・やはり、薬剤の投与による副作用は抑えられんか。人とは脆いな」

博士はボサボサの黒髪を掻き、よれよれの白衣を翻し立ちあがった。そしてそのまま部屋を出て、廊下の隅にある嚴重にロックされたドアの前に立つと、カードキーを出し、横に設置されたスロットにカード通し、タッチパネルでナンバーを打つ。ドアが開いた。

中に入っていく博士。部屋の中は緑色のライトで照らされている。正確には、複数あるガラスのケースを照らしているライトだ。

その中に入っているのは複数の脳髓、眼球、臓器、そして完全な人が一人。

それらはまだ生きている状態で保存され、常にデータを採取され、管理されている。博士にはそれらは人ではなく研究対象。ただ、投薬をし、刺激を与え、その反応を記録させるための物ではない。

「投薬だけでは回路は開けても十分な持続には至らんか・・・」
データをしながらそう呟く。

回路、それは魔術師と能力者の小さな違いにして最大の難関。博士は回路をこじ開け、魔術師と能力者の違いを無くす研究。

博士の研究は『能力者を魔術師にする』そういった研究だった。

「やはりサンプルが足りんか……」

博士の研究に使用されるのは魔術師と能力者の二種類のサンプルだが、学園都市にいる以上……いや、科学サイドにいる以上魔術師のサンプルなど手に入らない。今サンプルに使っている魔術師は、数年前に科学サイドと魔術サイドの合同討伐の際に手に入れたものだ。

「どうしたものか……」

博士は悩む。その時、ふとある事を思い出した。あの検体達は今どこにいるのだろうか。あの検体達ならば、少々の事では壊れないし、ある程度の無茶は何とかなるだろう。

「探してみるか」

そう言うと、博士は部屋に備え付けの通信端末を起動させた。

闇は深く、捕らえた者は逃れ得ない。

捕らえられた者達は踊る。誰かの手で。

偶然を装う必然で。必然を装う偶然で。

そうして、正義の味方と道化の物語は動き出し、交わり始めた。

間幕（後書き）

零慈「今回短いな」

生物「間幕だからな。だから今回はこの後書きを長くしてるんようとしてんだよ！だから協力しろ主人公！！」

零慈「んな事してないでさっさと続き書け」

生物「分かってる分かってる。ああ、零慈」

零慈「ん？」

生物「今回は特別ゲストを呼んであるからな」

零慈「特別ゲスト？」

生物「では！！どーぞー！！」

華姫「やつほー」

永希「どうも」

零慈「生物。これは？」

生物「特別ゲストの双子です！！ちなみに、華姫ちゃんに脅されてこのコーナーに出した訳ではありません！」

零慈「・・・生物すまんかったな」

華姫「はいはい、男二人で話してないでアタシを出さないワタシを！ー！で、何時になったらアタシを主人公にしたのを書くの？」

生物「そんな構想はございま（シュツ）す！ー！いつか書きますからナイフで喉元狙わないで！ー！？」

永希「生物さんも大変ですね」

零慈「永希、お前は良いのか？」

永希「それは良いですよ。ボクは目立つの苦手ですから…それに、表に出たら影の支配が出来なくなりますしね（ボソツ）」

零慈「ボソツと何か怖い事言わなかったか？」

永希「いいえ何も」

華姫「さあ！ー！早く執筆活動しなさい！ー！」

生物「ひいひい！ー！ナイフを振りかざすな！ー！つてぎゃあああああああああ！？」

零慈「はあ…ではみなさん、また次回に会いましょう」

生物「作者を助けろおおおおおおお！ー！」

第四幕 朝の風景 (前書き)

投稿遅れた (;) 申し訳ない

第四幕 朝の風景

朝、陽光がカーテンの隙間から差し込み、零慈は目が覚めた。

ダイニングに行く、パジャマ姿の永希が起きていて、既に朝食の準備をしている。ふわりと甘い匂いが漂ってくるのを感じると、今日のメニューはホットケーキのようだ。

「ふぁ・・・おはよう永希」

「おはようございます兄さん。後少しで朝食が出来ますから、華姫を起こして来てくれますか？」

そう言うと、フライパンを動かして、準備を続ける永希。

「仕方ない・・・」

まだ眠い目を擦りながら零慈は、ダイニングを出て、華姫の部屋の前に立った。

「はぁ、まだ寝てるんだろうな」

何故か傷ついたドアをコンコンと叩く。ドアに掛けられた【入るな】と可愛く書かれたプレートが少し揺れるだけで、反応は無い。二度目、少し強くドアを叩くが、さっきよりプレートが揺れるだけで、華姫からの反応は無し。

三度目、四度目、五度目と徐々にドアを叩く強さを高めると最終的には、ドラマでよくある借金取立人並みの威力になっていた。が、反応は相変わらず無し。

「いつもの事だが・・・これでなぜ起きないんだか」

諦めた様にそう言ってドアを開ける。

ガチャ ドアを開ける音

ヒュッ 仕掛けが作動してナイフが飛んで来る音

ドス 一歩引いて避けたナイフが床に突き刺さる音

パシッ 一本目のナイフの影に隠れて飛んで来たナイフをはたき
落した音

ドアを開けた瞬間にナイフが飛んで来る家はなかなかないだろう。
が、零慈達にとってはこれが日常。まあ、ユダ派という特殊な生活
をしていたため仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「おい華姫。起きろ」

人形だらけの部屋の中を歩き、ベッドに近づくまでに幾つかの人
形に隠れたトラップを解除し、華姫に声をかける。このとき声をか
けるだけにしとかなければいけない。

そうでなければ、『何故か』華姫のベッドの横にある鉄の乙女が
零慈に向かって抱擁してくるだろう。
アイアンメイデン

「迎撃術式の改良か。条件を満たすと発動して、単純な行動をす
る・・・何気にゴーレムの術式と混ぜてるし。才能の無駄遣いとは
この事か」

鉄の乙女の顔の部分をパカッと開ける。そこには顔の裏に描かれ
た『陣』。その『陣』には幾重にも文字の羅列と不思議な記号。魔
術が使えなくなったとはいえ、零慈は元魔術師。その刻まれている

模様の意味を理解した。

「たく・・・すう」

頭をがしがしと掻くと、零慈は大きく息を吸い込み。

「起きろおおお！！！！」

華姫の耳元で大声で叫んだ。

鉄の乙女に刻まれた術式は対象に触れたときに発動する術式構成をしていた。ならば触れなければ良いだけの話。

「ぐぎゃ！？」

思った通り、そんな『女の子が発してはは良くない様な声じゃない叫び声』を上げ華姫起床。

だが、その反動で華姫が零慈にぶつかってしまったのは予想できなかった。

結果、鉄の乙女は零慈に愛の抱擁デスタインをして来た。

「なんでさあああ！！！！」

この朝の叫び声が、このマンションの目覚まし代わりになっていたりいなかったり。

「まったく。毎朝毎朝、なんで起きんかな」

華姫が起きてからしばらくたって昼食中。ふわふわのホットケ―

キにたつぷりのメイプルシロップとバターをかけ、それをミルクのみを入れたコーヒード流し込む零慈が呟いた。

「知らないわよ。それより兄さん。後で私の『リリア』直しとい
てよね」

「いや、確かに蹴って凹ませたのは悪いが・・・あのトゲトゲしい鉄の乙女に『リリア』などという可愛らしい名前は似合わない。と、お兄ちゃんは思うんだが？」

バターとメイプルシロップは控えめにした華姫がストレートのオレンジペコを飲みながらぶつくさ言うのを、零慈はなんだかなーという表情で聞いていた。

「まあまあ華姫。華姫が起きてこないから悪いんだよ？・・・つて、兄さん何ですか？不思議な顔して？」

途中で零慈を擁護しに話に入って来た永希を見て 正確には永希のホットケーキを見て怪訝な顔をする零慈。

「いや、長い間一緒にいるが、流石にそれは味覚を疑うのを通り越して、尊敬に値するなーと思つて・・・」

永希のホットケーキには何故かバターの代わりに大根おろし、メイプルシロップの代わりに醤油。そんな、和洋の文化を混ぜ合わせて出来た邪神の様なものがあつた。ちなみに飲み物は緑茶。

「永希、アンタいつペン味覚を調べた方が良くない？双子のアタシでも流石に引くわ・・・」

「美味しいのに・・・兄さん達には日本の和の心が解らないんですかね？」

そんなニッポン大好きな永希だった。

朝食を終え、即家から出ようとする零慈。だが、華姫がそれを許さない。金槌を零慈に押しつけ。

「『リリア』の修理よろしく 出来てなかったら・・・」

「出来なかったら？」

「PCのデータ飛・ば・す」

「身命に変わっても『リリア』嬢を綺麗にドレスアップさせていただきます！」

それは綺麗な敬礼だった by 零慈

第四幕 朝の風景 (後書き)

零慈「さて良い訳を聞こうか？」

生物「バイト忙しくてね…後、ゲームのセーブデータ飛んじゃって…」

零慈「はい良い訳はいいから。読者さんに謝って」

生物「このたびは誠に申し訳ありませんでした。なるべく早く上げれるよう精進いたします」

零慈「ホントにすいませんでした!!」

生物「さて、気分を変えて・・・恨みごとを一つ」

零慈「突然なんだよ？」

生物「いやね、6月に昔の友人が北海道にて結婚することになったね」

零慈「めでたいじゃないか。この場を借りておめでとう」

生物「ふふふ・・・」

零慈「何故藁人形なぞ持つてニヤニヤしてんだ？」

生物「いやいや・・・もてない男の嫉妬を知れと」

零慈「やめとけ、空しいだけだ」

生物「なら・・・祝ってやる!!」

零慈「ツンデレめwwww」

第五幕 スキルアウト (前書き)

今年も新茶が届きました () つ日

第五幕〜スキルアウト〜

永希と華姫は街をぶらぶら歩いている。

これと言つて用がある訳でもない。だが、街に出なければ分からぬ事、新たな発見がある。そのため、割と人が多く目立たない休日の街を魔術師の二人は歩く。

「で、永希。今日はどうしよつか？」

「華姫の行きたい所でどうぞ。僕は本屋とスーパーさえ回れば良いから」

インドア派の永希は読書が趣味だ。こうして華姫に連れ出されなければ、一日中家で読書や家事をする。が、大抵華姫が零慈、または両方のどたばたを納める兼後始末で邪魔されたりする。

「ホントに好きねー。ワタシは全然良さが分かんないし」

「まあ・・・華姫はね・・・」

一応、家事は当番制なのだが、零慈はともかく、華姫は普通の食材でさえ、産業廃棄物 いや、核物質でさえ敵わない『モノ』に変化させる。一度、鍋が溶けだした事もあったほどだ。更に言えば『食材は高ければ良い』などと思っているので一人で買い物に行かせた日には家計は火計で燃え盛る。

「あつ」

「ん？あつ」

人の多い表通りから裏に入った細い裏道。そこに足を踏み入れた永希と華姫の前に現れたのは、頭にバンダナと額当てをまいた少年と

「……どうした、半蔵……ぬっ？」

がっしりとした大男と

「駒場さんに半蔵どうし……げ!？」

髪の毛を金髪に染めたチンピラ少年だった。

「はーまーづーらー。『げっ!?!』て何よ『げっ!?!』て

華姫が浜面と呼んだチンピラ少年に近づく。浜面は冷や汗をダラダラ流し、後ろに下がるが、追いつめられている。

「……華姫、こんなところで、なにをしている……?」

そう聞いて来たのは大男。

「何も無いわよ。ただの散歩。あつ、永希。こっちの三人は、大きいのがの駒場利得。バンダナ巻いてるのが服部半蔵。で、この金髪の大男が浜面仕上ね」

「バカ犬って!?!華姫姐さんそれ酷いくないっすか!?!」

「ああ、あのバカ面さんですかお噂は華姫から。大層バニー好きだそうで」

苦笑する永希。

「華姫姐さん！？なに教えてんすか！！」

浜面が鳴く・・・もとい、泣く。

「それで、華姫の姐さん。そっちの人は？」

半蔵が永希を紹介してくれと、華姫に促す。

「双子の弟の永希よ」

華姫が三人に永希を紹介すると駒場は納得したように頷き。

「・・・弟、か。確かに、容姿が似ている・・・」

そう言っつて永希に手を差し出した。

「・・・紹介に預かった、駒場利得だ・・・」

「神鳴永希です。これからもあの姉がご迷惑おかけすると思いませんが、僕共々どうかよろしくお願いします。あっ、華姫が何かしたら僕に言っつてください。きっちりオシオキしますから」

永希は駒場の大きな手を握る。ごつごつして、傷だらけの手だった。ごつごつした皮膚とその傷は何度となく何かと戦った証拠だ。何かを護るため、何かを壊すため。

それは、永希と同じ拳。

永希の手は指出しグローブと、羽織ったロングのスーツの様に改造された長袖のグローブで大半は見えない。だが、僅かに見える指先

は切り傷だらけだった。

そんな拳だが、二人の手は暖かった。

「ふふふ。あなたとは気が合いそうだ利得さん」

「・・・俺もだ、永希・・・」

二人はにっこりと笑った。ただ、駒場の笑みは不器用で、永希の笑みは珍しく家族に見せる様な自然な笑みだった。

「なーんか、あの二人分かりあってるし」

蚊帳の外の半蔵が呟く。

「駒場×永希・・・ないない」

同じく蚊帳の外の華姫は、二人を見て考え事をしていたが首を横に振り、

「華姫姐さん。それってどういう意味っすか？」

浜面は華姫の言った意味が解らなかつたようだ。この世界には、分からない方が良い事があるのだ。

ちなみに余談であるが、浜面×半蔵が女子のスキルアウトの間で取引されていたりなかったり・・・

ここは、第7学区にあるスキルアウトの根城。根城といっても、何があるわけではない。元は何かのビルだろうが、ボロボロで、少しカビ臭い。そんな中に、五人は窓枠に座ったり、適当な物を椅子代わりにして喋っていた。

「で、今。駒場さんがこの第7学区をまとめ回っているわけよ」

浜面が威張るように言う。

「へー。話には聞いてたけど、駒場、がんばってるんだ。もともと、顔と図体に似合わず紳士だもんねー。後、そのバニー大好き変態男が威張るのはなんかイラツと来るから、後でやる」

「姐さーん！？そりゃないっすよー!!」

ははは。とみんなが笑う。楽しいひと時だ。

「で、今のところどれくらいまとめられたのよ?」

「・・・80%といったところだ・・・」

『もう80%』か『まだ80%』か。それは、まとめ始めた時期を知らない永希は分からなかったが、自分を覗いた全員の纏う空気の変化から『まだ80%』の方だと思った。だが、第7学区に存在するスキルアウトは多い。

スキルアウトは、無能力者（レベル0）の武装集団の総称だ。大半は寮に住んでいても通学しない者、通学はしても夜になると行動する者で、簡単に言えば不良やチンピラの集まりである。しかし、武装してATMを襲うなど、ギャングに近い集団も多いのがこの学

園都市の不良達だ。

そんな危険な連中を80%とはいえまとめ上げる、その力とカリスマ性。それは称賛に値するだろう。

「残りはどこよ？」

「こまごました小さなグループが大半ですね。多分、そこはすぐにまとめられますけど・・・」

「けど？」

話していた半蔵の顔が険しくなる。

「第10学区の『ビックスパイダー』ってグループがちよっかい出してきました。後、一部の能力者も色々と手を出してきましたね」

胸糞悪いと言った風な半蔵の声色。浜面も珍しくまじめな顔をしている。

「なぜ能力者が？」

それが何を意味するか、永希はある程度は理解出来た。だが、口からポロリと言葉が零れ落ちた。しまったと思っ間もなく、浜面が忌々しげに話し出した。

「無能力者狩りつてやつだ。高位の能力者になると、自分の力を見せびらかしたり、試したりしてーんだらうよ。そいつらは今、まとまってないスキルアウトを襲ったりしてるが、まとまったりしたら、後々めんどーな事になる。それを怖がって邪魔してくるんだよ」

謂わば、子供が新しい玩具を見せびらかしたり、それで遊んだりするのと同じ。その対象が『物』から『者』になっただけ。酷く幼稚な理由。

だが、それは誰でもある事だ。新しいものをどう見せるか、どう遊ぶかが大人と子供の違いだ。無能力者狩りをしている連中は、子供のまま持て余す力を手に入れてしまった。

「……今のところは、なんとか被害を抑えるくらいしかできない……」

駒場は拳を強く握っていた。自責の念と能力者への恨み、それが駒場を苛む。

「利得さん……あの、ぼ「どこだ！！出て来やがれ！！このゴミ共！！」なっ!？」

ビルに響く罵声。全員が外を見ると外には数人の男達が立っていた。

第五幕〜スキルアウト〜（後書き）

零慈「おい生物!!」

生物「なーに？今ゲーム忙しいんだから話しかけんなよ」

零慈「やつとる場合かああああああああ!!」

生物「ぎゃあああああ!?セーブ中にメモリ抜くなあ!!」

零慈「んな事よりアクセス数見たか?」

生物「へ?なにになに?何か良い事で...も...」

零慈「理解したか?」

生物「アクセス6,666...だと!？」

零慈「よかったな!」

生物「...どうしよう...泣きそう」

零慈「お礼言つてかにしろ」

生物「うん...みなさま、ありがとうございます。これからもがんばりますので、どうぞ終りまで長く付き合ってください」

零慈「生物の拙い文章をここまで読んでくださっている皆様、今後
もよろしく願います」

零慈「ところで生物」

生物「なに、い、い」

零慈「うわ、鼻水と涙でただでさえ酷い顔が更に酷く...いや、良い。
それより、今回俺が出ていないんだが...」

生物「...ああ、それね...（涙&鼻水ふきふき）」

零慈「俺、主人公だよな?」

生物「まあ、一応主人公だな。でも原作でも上条の出番無い回ある
し...いいんでない?...もちろん、双子に脅されて書いた訳じゃナイ

「デスヨ？」

零慈「永希もかよ」

第六幕 愚者には鉄槌を (前書き)

一緒にいかがですか？

（つ酒）

第六幕 愚者には鉄槌を

「おらおらゴミ共早く出てこいよ！それとも弱いから出れませーんてか？ギャハハハハ！」

下品な笑い声がビルの中にいる全員脳に響く。正直不快だ。

「半蔵。あのパカは？」

華姫が冷ややかな目で下で騒ぐ少年達に見ながら半蔵に聞いた。

「あれは・・・確か、無能力者狩りをしてる能力者、ですね・・・」

半蔵は、少年達を見ながら少し考えて答えた。

「そうですね・・・あれが・・・」

永希は無表情で見降ろしている。

「駒場さん。どうしますか？」

浜面は真っ先に飛び出して行きそうなのだが、以外と冷静だ。しかし、拳を握りしめているのを見ると大分頭に来ているらしい。

そんな浜面の問いに、辺りを見回す駒場。相手は3人。数はこちらの方が上だが、3人とも

能力者だろう。一人、先ほどから叫んでいる奴。奴はこちらが調べた無能力者狩りの要注意人物の一人だ。名前は張谷 寧（はりやむしろ）バイロキネシスト 発火能力者レベルは4（大能力）。火を直接当てず、熱

風で相手をいたぶるゲスだが、強い。

「……今は逃げたほうが「出るわよ！」華姫……」

華姫が駒場の言葉を遮った。駒場はこちらに女子の華姫がいる事、永希がいる事を考慮し、逃走を選択しようとしていたのだが、その華姫がやる気まんまんなのだ。彼女の瞳の中で燃えるのは紅蓮の炎。

「アタシの友人+ペットをバカにするのはアタシが許さない」

「華姫姐さん？ペットって俺の事ですか!？」

「あら、浜面。自覚あるじゃない。後でドッグフード買ってあげる」

「姐さーん!？」

全員が苦笑し、空気が変わる。そんな中、永希が駒場を見て。

「利得さん。僕も華姫も、いろいろ事情があつてこういうのは慣れてます。それに、これでも僕も、好感を持てる人達を貶されて怒ってるんですよ？」

につこりとほほ笑み、そう言った。

「……しかし……」

それでも心配なのか、止めようとする駒場。

「大丈夫です。地の利は僕達にありますし、このメンバーならあ

の程度の奴等なら・・・」

一息ついて。

「地獄を見せてから殺れます」

一瞬、永希の目がギラリと光った。瞳の中には静かな蒼い炎。華姫の様な荒々しい炎ではない。触れれば火傷では済まない。炭化するまで燃やし尽くす、そんな煉獄の炎が見えた。

「うわー・・・永希が本気でキレてる・・・あの三人組み、ご愁傷様」

一応十字教なのに『南無南無』とか言って手をすり合わせている華姫。そんな華姫を見て『はあ』と溜息を吐いて諦めた駒場は。

「・・・わかった。しかし、無茶はするな・・・」

そう念を押した。が。

「それこそ分かってますよ。さて・・・早速作戦を考えましょうか。確実に心折る、心折設計しんせつせつけいの作戦を」

そこに、いつもの無害な笑みは無く。悪魔の様な笑みがあった。

「はあはあはあ・・・」

寧はビルの中を走っていた。他の二人とははぐれ、たったひとりで。

「くそ！なんでだ！！なんであんなゴミ共に！！」

付き添っていた二人は、自分の『遊び』を面白そうだとして来た同じクラスの奴らだ。

そんな二人と、スキルアウトがたむろっているというポロビルに来た。ちょうど、そこに入って行く人影を見たときは『やった！』と思った。人数的にもちょうど良かった。

何より女がいた。なかなかの美人で、男共を始末した後で、犯そうと思った。ついでに、ビデオでも撮っておけば何度でもヤレるとそう考えて、ビルの前で三人で女のどこを使うか、誰が一番最初に突っ込むかなどを話し合った。

話し合いが終り、ビルの中の奴らを挑発した。今までは、それで相手が勝手に突っかかって来てくれた。が、今回の奴らは、少しは賢い様でビルから出て来なかった。

あまり外で騒いでいても、奴等に逃げられたら終りだ。そう考えた三人は中に踏み込んだ。所詮は低レベルの集まり。危険はないはずだった。

入って二階に上った時に、小さな音がしたと思ったら階段が崩れ落ちた。それと同時に、大量の粉がぶちまけられ視界が奪われた。そのまま下手に動いたら先ほど崩れた階段に落ちてしまうし、自分の能力では粉塵爆発の危険もある。そう思い、動けなかった。

粉が晴れた時、周りに二人はいなくなっているもなにもできなかった。

寧は二人を探した。そう広くない4階建てのポロビルだ。目的の二人はすぐに見つかった。

ただし、一人は逆さ吊りにされ、手はあり得ない方向に曲がった状態で、顔面を鼻水や涙でぐしゃぐしゃにして。

一人は足や手の関節を外され、泡を吹いて気絶して。それを見た寧の心中には、怒りより恐怖が生まれた。そして理解する前に走りだした。

二人は寧よりレベルは低かったが、彼らの能力は低レベルに負けるものではない。それは、同じクラスの寧がよく理解していた。

走る寧の心には恐怖と混乱。そして『手を出してはいけない者に手を出した』という言葉があった。

寧は一階を目指す。上って来た階段以外にも非常階段くらいあるはずだと思い、それを探した。

非常階段は意外と早く見つかった。

「はあはあ・・・くそくそくそ！！外に出たらスキルアウトに襲われたとアンチスキルにでも、正義パカ（ジャツジメント）に通報してや・・・」

階段を降りながらそう呟いていたら視界がぶれた。

「あれ？あれれれ？」

天地が反転し、左右が分からなくなる。そうこうしているうちに、背中からの強烈な衝撃。

その衝撃で、寧の意識は途切れた。

第六幕 愚者には鉄槌を (後書き)

華姫「ついに始まったわよ！アタシによるアタシの為のアタシのコーナー！てか、本編で出番ほとんど無いじゃない！作者！！どういうことよー！！」

生物「いやぁ・・・華姫より永希の方が動かしや「あゝ！？」華姫ちゃんの良さが書ききれませんでした！！」

華姫「そうよねー。仕方ないわ。今回は許してあげる」

生物「ほっ・・・」

永希「あの、作者さん？」

生物「ん？いたの永希？」

永希「最初っからいましたよ・・・ところで、こんなものが」

生物「手紙？どれど・・・リア充氏ね！！！！」

華姫「いきなり叫んでどうしたのよ？貸しなさい。どれどれ・・・
『拝啓 (ryこの度、結婚することに・・・また友達が結婚？しかもでき婚て』

生物「ふふふふふふふふふふ・・・どうせ、バイト以外じや部屋にこもってる俺のせいさ・・・いいもん！！羨ましくないから牛刻参りしてきてやる！！！！」

永希「羨ましいいんですね・・・なんとって、小学校以来彼女がいないんですし・・・彼女いない歴〃年齢より悪いですからねー。ヘタレで、アニオタ、ゲーオタ、長インドア派 (誤字にあらず) そりゃ外に出なきや彼女何かできませんし、あなたの回りの女子方は、せいぜい女友達兼悪友ですからねー」
生物「・・・言い返せないorz」

永希「さて、作者が適度に鬱になってるので僕が代わりに。みなさん、この拙い物を読んでくださってありがとうございます。さて、

今回めでたくアクセスが8000を突破。これからも作者を鞭打ち、釘打ち、縛り付けて書かせますので、どうぞ応援してください。では、またいずれ」

華姫「はっ！？私のコーナーが永希に盗られた！？」

幕間劇〜月の下で〜（前書き）

誰か風邪薬ください・・・（
;

幕間劇 月の下で

涼しい風が部屋に吹き込んでくる、そんなある日。

「月見をするわよ!」

華姫がそんな事を言っていた。

「突然どうした華姫・・・あれか? 団子が食いたいのか? それとも酒か?」

零慈が吸っていた煙草を落としそうになりながらも、そう聞いた。

「いえいえ兄さん。華姫の事ですから気分ですよ?」

永希は何事もなかったように、文庫本片手にコーヒーを啜っている。

「二人とも、私が風流を感じるためにとか思わないのかしら?」

ムスツとしている華姫だが。

「「思わない」」

そう二人の兄弟から言われてしまった。

「兄さん、永希。後でオシオキ・・・良いわ、今すぐにでも」よし! 月見をするぞ!」

何処からともなく拷問器具コレクションを取りだした華姫を見て、すぐさま準備に取り掛かる兄と弟。

ちなみに、この家での順位では 永希≡華姫>零慈 となっている。

「あつ、月見するなら何人が呼ぶか？」

「良いわね。なら、アタシ達は友人+ペットでも呼ぶわ」

「ですね。兄さんは誰を？」

「永希が華姫のペット発言に突っ込まないのは置いといて・・・上条と土御門、青ピぐらいかな？」

「兄さん友人少ないですからねー」

「……………ナイテナイヨ。ボク、ナカナイヨ」

そんなこんなして、月見の準備は進められた。

「という訳で始まりました!!!」ドキッ!一人身は辛いから傷を舐め合おうぜ月見パーティー!!!」司会進行は俺!神鳴零慈がやってやんよ!!--」

マイクを持って、キラキラ光る司会者の衣装を着た零慈が叫んでいた。

無駄に高いテンション、無駄に長いタイトル、そして何より。

『いえーいーいー!!』

無駄に多い人数。数十名は集まっていた。皆がいろいろ料理や菓子、飲み物や酒を持ち寄ったおかげで食料の心配はないが、公園は大宴会場になっていた。

何故こんな事になったかと言うと。

〈回想〉

「なあ上条。月見するけど来るか？」

「上条さんの切迫した経済状況で、そんなうれしい提案を呑まない訳ございません!! ついでにインデックスを呼んでよろしいでしょうか!!」

「ああ、良いぞ。人数多い方が楽しいし、他に呼びたければ呼んでくれて良いぞ? ただし、少しは食料持ってきて来いよ?」

「よし!!—食分浮いた!!」

「・・・とか喜んでるが、周りが聞き耳立ててるのに気づいてるのかこいつ・・・気付いてないだろうなあ」

〈回想2〉

「土御か「行くにゃー!!」まだ何にも言っただけえ!？」

「零じん、俺の情報網に抜かりはないぜよ」

「無駄にスキル高めおつて・・・」

「そうだ零じん。舞夏の奴も呼んで良いか？」

「おお、呼べ呼べ。むしろ、舞夏の激ウマ料理が食えるなら、こっちからお願いたいくらいだ」

「分かったぜよ！楽しみにしてるにゃー」

く回想く

「と、言う訳で来なさい！」

「華姫姐さん、こっちの予定は「無視よ！」「そうですか」

「・・・俺も、行って良いのか？・・・」

「はい、利得さんにはお世話になってますし。少し、食料を持って来ていただければ」

「・・・わかった、楽しみにさせてもらおう・・・」

「よし！飲むぞ！！半蔵！秘蔵の酒出さぜ！」

「わーてるよ。華姫の姐さん、楽しみにしててください」

「ふふふ・・・ん？一瞬黄色い着物が見えた気が・・・気のせいかな？」

といった理由である。つまりは『呼んでないのに話を聞いたから来ちゃった』というちゃっかり者が多いのだ。

しかも、集まった人物の幅が広い。教師、生徒。アンチスキル、ジャッジメント、スキルアウト。常盤台中学、柵川中学。オリジナルとクローン。レベル0からレベル5。魔術師と能力者。人と人外。もう、ごった煮状態だ。しかし、そんな中でも笑いが絶えないのは、それぞれの根が良いからだろう。何故か、数名の悲鳴が聞こえたりしてるが気にしない。

「俺、意味ねーじゃん!!」

もう司会進行など気にしない面々。一部は既に酔っている。それで良いのか教師陣？

「ふう・・・」

零慈は騒ぎから少し離れた。木に背中を預け、ひとり月を見上げる。

淡い光を放つ満月。星は僅かに見える程度だが、確かにあり、夜空を彩る。

『だから!! 私は!!』おねえ様は私のモノですわよ!!』誰よ! 黒子に酒飲ませたのは!』

『はい』『華姫!? アンタ』お姉さまお姉さま!!』『あーうっとーしい!!』『うわ!? ビリビリ!!』こっちに電げぎゃああああああ! ? 俺のピラフが!!』『むぐ! トウマ、それ私のかも!』『上条当麻!! いくら月見といっても騒ぎ過ぎよ! 五和さんと風斬さんが困ってるでしょ!!』『あ、あの。私は大丈夫ですから』『は、はい。あの・・・とりあえずおしほりを上条さんに・・・』『ハハハ。かみゃん、相変わらずのフラグ体質や

ねー殺して良い？』 『だねー殺したくなるよ』 『生物、あなたね・・・まったく・・・上条当麻にインデックスもこのような・・・』 『まったくだね。ここにはあの人がいるから煙草も吸えないし・・・僕のような迷える子羊は、タールもニコチンも無い地獄に落ちてはいけないのだけだね』 『にゃー。それはただのニコ中の戯言ですたいそれより舞夏の料理でも食べるぜよ！！』 『あーアニキー。あんまり一人占めすんなよー。というか永希、料理上手いなー。なんか特訓とかしたのかー？』 『いえいえ、ただ周りがしないから仕方なく上手くなっただけです』 『まったく、大変ですねとミサカは同情します』 『まったくなのよなー。おつ、これ美味いからちみつ子食ってみるのよ』 『むー！これ美味しい！！ってミサカはミサカは貴方に勧めるよ！！』 『あー俺はもう腹一杯だっつってんだろぅがぁ！おい黄泉川！！このガキどーにかしろ！！』 『浜面ー。あんた、酒なんか持つて来て、またしよっぴかれないじゃんよー』 『うげえ！？これはそのだな』 『だめですよー。学生さんがお酒なんて。お酒は20を過ぎてからなのです』 『・・・その背格好で飲むのも、いかななものかと・・・』 『駒場氏が真理を突いた！！』 『郭！！そう言いつつ俺のピザとんじゃねえ！！』』

『ふふ・・・私はこんなところで影が薄い・・・』

そんな賑やかな(?) 声が聞こえる。昔、ユダ派が集まって宴会を開いた時もこんな感じだった。

今は亡き両親、行方知れずの仲間、幼き頃の自分・・・そんな、みんながまだいた頃。

その時に、今の自分と同じ様にしていた父の言葉が蘇る。

『零慈。人はそれぞれ小さな世界を持ってんだ。人は、その世界を創り、動かせる・・・その所業は謂わば、神様と同じだ。己が動けば己の世界が動き、他者と交われれば世界は広がる。楽しみ。今を、

未来を、広がる世界をな』

まったく、破天荒な父だった。人が神などと、まともな聖職者や信者に話したらどんな目に合うか・・・それでも、父は持論を貫きながらも、世界を広げた。本人曰く、楽しいから。ホントに自由奔放な人だった。子供の様な大人だった。それでも、その背中は大きかった。

月を見上げると零慈は呟く。

「親父・・・あなたの生き方、楽しいもんだな」

呟きは喧騒に消え、答えは無い。されど、言葉にすることで確かになる。

「兄さーん。そんなところで黄昏てないでこっち来ましょうよー」

「というか、兄さんが黄昏てるとか気持ち悪いからこっちで酌しなさい！！」

「華姫！？酒飲むなって言っただろ！？てか、教師陣止め「もっと飲むじゃん（です）！！」「この巨乳&ロリ教師の酔っ払いめ！！」」

彼は言葉を胸に大切な者達の元に戻る。騒がしくも、楽しく、世界が広がる場所へと。

これは、動乱の最中の一日。儂くも、大切な一日。

願わくば、こんな日々が続きますようにと、道化は願う。

ただ、それだけの話。

〱後日談〱

「なあ華姫・・・この辞書が作れそうな紙の束は何かな？」

「ああ。この間の領収書。色々買ったり、あの公園の使用許可の為にいくらか払ったから」

「ざけんなあああああ！！！！」

楽しいひと時と思い出の代償に、零慈の財布が氷河期になったと
な。

幕間劇〜月の下で〜（後書き）

生物「という訳で幕間劇でしたー。なお、零慈君はバイトのためお休み中です。正直金使い過ぎたらしいな」

永希「ですねー」

華姫「流石にあそこまで集まるとは予想外だったわ・・・」

生物「さて、今回はpv9000突破記念で書いた訳です。これもひとえに読んでくれる皆様のおかげ。この場を借りてお礼を述べさせていただきます」

永希「ありがとうございます」

華姫「ありがとねー。お礼に私のペットあげるわ」

浜面「ちょー!? 華姫姐さん!? 何てこと言ってるんすか!?! てかここ何処!?!」

生物「あーここはペット禁止なんだけどなあー」

浜面「てめー!? 俺、周囲にまでペット認識されてんのか?!」

生物「まあまあ、半分冗談だと思っとけ」

浜面「半分は!?! てかそれでも思うだけかよ!?!」

永希「はいはい、ペツ・・・浜面さんは置いといて先に進みましょうね?」

浜面「ペットって言いかけなかったか!?!」

華姫「そうね。浜づ・・・ペットはどーでもいいか」

浜面「よくねーし!?! しかも言い直さなくても良くなかった!?!」

華姫「はいはい。後でドックフードあげるから黙ってなさい」

浜面「んだとこの虚乳!?!」

生物&永希「・・・（笑ったらダメだ。離れなきゃ死ぬ）」

華姫「はーまーづーらーくーん。字が違うわよ? しかも当てつけ? 当てつけよね? 当てつけですね?」

浜面「ちょー!? 今のは口が滑っただけ滑ったって事は、心の中ではそう思ってるんだ?」・・・（視線をそらす）」

華姫「・・・(ニッコウ)」

華姫「死にさせ」

くく少々お待ちくださいくく

華姫「浜面は急病で帰っちゃったわ」

『ちよ?!息してないぞ!誰か早く救急車!!カエル顔に急いで見せんとマジで死ぬ!!』

『出血止めてください!!!ショック死しますよ!?!』

華姫「二人も急用で来れなくなっただわ・・・と、言う事で。ここから残り少ないけど私が進めるわ」

華姫「まず『hayateさん。メールありがとうございます。作者も元気になりました、雨の日にまで外仕事に出て風邪ひきました(笑)』生物、バカじゃないの?」

華姫「次に、『今回は作者が登場してます』・・・そっぴや居たわね・・・」

華姫「さて、最後ね。『ここまで読んでくださっている皆様。こんなダメ作者ですが、なんとかがんばっていますので温かい目で見てください、少しでも気に入れば、お気に入り片隅に入れていただければ幸いです』だって」

華姫「じゃ、今回の幕間劇はこれでおしまい。これからの『とある道化の英雄譚』もよろしくしなさいよ!!--」

『心肺停止!?!ちよ?!浜面まだ逝くな!!--』

「華姫」・・・綺麗にメたのに・・・後でリアを使ってあげるわ・・・

第七幕 胸を張って (前書き)

最近熱いですね (; (つ 【麦茶】

第七幕 胸を張って

「終わったぜ」

階段から落ち、地面で気絶している寧を一瞥し、半蔵はそう言った。

「・・・すごかったな・・・」

駒場ですら啞然とする。

「えげつないというか、鬼畜というか・・・華姫姐さんとはまた違った怖さだな」

浜面は少し引いている。

「アタシも永希だけは敵に回したくないわ」

華姫も少し引いている。

「嫌ですぬ二人とも。まだ優しく処理しただけですよ？これ以上やるなら華姫の玩具（拷問道具）借りないといけませんし、片付けも面倒ですから」

そんな面々をしり目にさらりと恐ろしい事を言う永希。

永希の立てた作戦はこうだった。まず、階段を潰して退路を潰す。空を飛んだり、レポートで一気に自分達のいる部屋まで来ずに、わざわざ階段で来た事から、そういう能力者ではない事がうかがえたため、この方法を取った。

階段の支えの破壊には少し魔術を使った。永希が得意とする『境界』の応用だ。これは、境界を支えの部分に展開し、支えを切断した。

もちろん、境界とは通常は物体にほとんど干渉しない。だが、物体に干渉するように改造を施した術式は難なく支えを切り裂く。ただ、この術式は対象が動くと発動しないデメリットがあるため、こうした場合や、守りに徹する時にしか使えないのが難点だ。

次に、放置されていたセメント袋の中身を、浜面と駒場が上の階からぶちまけた。これで、厄介な寧の能力を封じ、同時に視界を奪った。

そして、パニックになっている二人を背後から華姫と半蔵が声帯を一時的に潰し拉致した。華姫はユダ派故に半蔵は忍者？故に、そういった人体の構造と隠密行動を熟知していたため比較的楽だった。そして、能力者二人が更にパニックに陥り、能力を満足に使用できないところを適度に私刑^{リンチ}。それを放置し、二人を見つけ、さらにパニックになり非常階段で逃げる寧を後ろから押し、落とすだけ。

「それにしても、よくこんな穴だらけの作戦に引っかけたなあ。あいつ程のレベルなら、攻撃を仕掛ければ俺達に手は無かったのに」

浜面は不思議そうに言う。

「攻撃を仕掛けてきても別の罠を仕掛けてましたが・・・基本、能力が使えなければただの学生と変わりない様なものですから。仲間を殺せば逆上したかもしれないませんが、痛めつける程度なら『もしかしたら自分も』なんて考えるでしょうし、何より、短くではあります。じりじり追いつめましたから。基本、ただの学生なら恐怖と混乱で逃げ出しますよ」

人は、恐怖や脅威には逃避を選ぶ傾向が強い。絶対の能力が一時

的に封じられ、一緒にいた仲間が消え、同じような力を持つ者がボロボロにされた。ここで立ち向かっていこうとするのは、パカが狂った者か、本当に強い『英雄』か『反英雄』ダイクヒーローだけだ。

「ねえ、『アレ(寧)』どうするのよ？捨てとくの？」

華姫が寧を指さす。寧はしばらく起きないであろう。

「……いや。アンチスキルに任せよう。半蔵、通報しておけ……」

「了解」

半蔵が手袋をはめ、奪った携帯でアンチスキルに通報した。そうして、ボロボロの三人を放置し、全員その場から離れた。

先ほどのビルから少し離れた別のビル。そこから、放置していた三人が救急車で搬送されていくのを見ていた。

「さて、終わりましたね」

「……ああ。永希、華姫。礼を言わせてくれ。今回は、手伝ってくれて助かった……」

駒場が双子に頭を下げる。それを見て浜面、半蔵両名も頭を下げ。

「華姫の姐さん。永希。今回はホントに助かりました」

「華姫姐さんに永希。ありがとございした!」

そう礼を言った。

「いえいえいえ!今回はこちらも頭にきましたし。お礼なんていいますから頭を上げ」そうよ!崇め奉りなさい!」華姫!？」

永希が恐縮そうにしてる隣でドンと無いむんん。もとい、スレンドーな胸を張り、堂々としている華姫。

「永希!アタシやアンタがいなければ、今回駒場達が逃げて新たな被害者が出るか、駒場達が戦って負けて病院送り、運良く勝ったとしても病院送りだったはずよ。そうすれば、ここ(スキルアウト)をまとめる連中がいなくなつて何があつたか分からないのよ?それを、こっちは無傷、あっちは重傷っていう、駒場達にとって最高の状態にしたのはアタシ達。ここは変な遠慮せずに胸を張るべきよ!」

そう言い放つ華姫。永希は少し虚を突かれたが。

「……ふふふ。そうですね。今回はそういう事にしておきましようか」

永希からは自然に笑みがこぼれた。こんな短い間に家族以外に自然な笑みを向けた事はどれほどぶりだろう。そう思っていると浜面が。

「胸を張る……?華姫姐さん胸を……」

そうポロリとこぼし、華姫の胸の辺りを見てしまった。半蔵と駒場、永希も、急激に下がる温度を感じた。

「浜面君？」

「へ？何すか？華姫姐・・・さ・・・ん・・・は!？」

浜面が失言に気付いてももう遅い。華姫は満面の笑み。この笑みで街を歩けばさぞ声をかけられるだろう。

目が笑っていないのを除けば。

「誰が！貧乳！！ペツタンコ！！だって!?!この!!!エロパカ面がああああ!!!」

「ぐは!?!ぎゃは!?!ぶうえ!?!ぐぼあ!?!た、助けて!?!」

！ のところで浜面を殴る蹴る。最終的には空中コンボ+壁際八メ技というハイテクニックをやっている華姫。

「浜面さん・・・いくら僕でも、今のは弁護できませんよ・・・せめて安らかに逝ってください」

そう言つて、十字を切る永希。

「あー浜面。骨は拾つてやる。ついでに秘蔵フォルダ&本も貰つといてやるから、安心して逝け。」

と、半蔵。内心では浜面と同じ事を思っていただけに、冷や汗ダラダラ。絶対、華気に胸の事は言わないと心に刻んだ。

「・・・浜面。自業自得だ。観念して、逝け・・・」

駒場は呆れ、事の成り行きを見守っている。

「ちよ！？三人とも俺死ぬの前提?!」

「まだ無駄口叩く余裕があるか浜面!!」

今度は蹴り上げからの対空コンボ。オーバーキルも遠の昔。

薄れ逝く意識の中、彼女にするなら物静かで優しい子が良いなあ
と思う浜面であった。

第七幕 胸を張って (後書き)

零慈「さてさて、最近影が薄い主人公ですよー」

生物「いきなり自虐かよ・・・いや悪い、そんな血涙を流しながらこつち見るな」

零慈「ふふふ・・・ど自称魔法使いの巫女さんと最近話が合ってた・・・」

生物「ここの幕間劇でも、あの扱いしたからな・・・正直すまんかった」

零慈「はあ・・・いつになったら俺の活躍の場が来るのやら・・・」

生物「お前、活躍の場って後々しかないからな？しばらく双子sideだし」

零慈「・・・俺、主人公だよな？」

生物「『双子に主人公の座を食われかけてる』な？」

零慈「あの腹黒に貧乳がああああああああ！？」

生物「零慈が何処からか飛んで来たアイアンメイデンに吹っ飛ばされたあ！？って！！これ華姫のリリア！？」

華姫「ハロー兄さん」

零慈「あががが！！？華姫！？」

永希「僕もいますよ？」

零慈「・・・ナゼココニ？」

華姫&永希「それはね、兄さんが失敬な事いうから(です)よ？」

零慈「ちよー！！ロンドン塔謹製拷問道具！？」

華姫「さあ」

永希「兄さん」

華姫&永希「お前の罪を数えろ！！」

零慈「どこの仮面ライダー！？いやああああああああああ！！」

生物「……えー教育上、並びに精神上とても悪い事が展開されて
おります……またカエル顔に頼むか……っ」と

生物「では、読者の皆様に無上の感謝を。それではままた次回にお
会いしましょうー！」

『その輪切りはいやー！！！』

生物「どこの輪切りだよ……」

第八幕とある不幸少年（前書き）

風邪には気を付けて） （つ）【風邪薬】

第八幕とある不幸少年

「結構時間食ったわね」

「・・・華姫があんな事しなきゃもう少し早かったよ？」

時間は程良く小腹が空く午後3時過ぎ。

あの後すぐに華姫の私刑は終わった。

それと言うのも、流石にどたばたやりすぎたのか、潜んでいた（？）ビルに警備ロボが現れたのだ。そうして、注意と身分証の提示を受けたが、偽造していた身分証を提示して事なきを得た。ついでに浜面の命も事なきを得た。

その後、華姫は浜面（という名の生ゴミ）をとりあえず、駒場と半蔵に押しつけたのだが、流石に浜面が荷物だったのか、半蔵がスキルアウト仲間に車を用意してもらい、運ぶ事にしたのだが。しばらくして数台の車が到着し、降りて来たスキルアウト達が華姫を見たたん『御姉様』や『華姫様』や『女王様』などと言っていたのを、永希は聞かなかつた事にするのだった。

「ふん。文句なんか浜面に言いなさい」

「まったく・・・で、どうするの？そこら辺の喫茶店でも入ってお茶にする？」

「そうねー・・・っと？」

とある公園まで来た時、華姫が足を止めた。

「華姫？」

永希が華姫の視線を追う。視線の先にいたのはがっくりとorz
こんな風にうなだれているツンツン頭の少年だった。

「で、吞まれたと」

「はい」

結果から言えば、二人はツンツン頭の少年に声をかけた。あまりに情けない姿だったからだ。そして事情を聞いてみれば、金を崩すためにジューズを買おうとしたら、その自販機は賽銭箱代わりの様な『お金を呑む自販機』だったらしい。しかも、崩す目的が食料を買うに使いつらい2000円札を崩すためという。

「不幸ね」

「不幸ですね」

「不幸でしょー。不幸ですよねー。ホントに不幸だー!!」

叫ぶ少年。流石に惨めと言うか同情するといつか・・・

「あの、お兄さん。食料で良かったら一緒に買いませんか？お金は後々返して頂ければいいので」

そう永希が言う。少年は顔を上げ

「いや、流石にそれは・・・初対面の相手に金借りるとかは・・・
つつか貸すのもどうよ?」

そう言う。性格は悪くない様だ。二人はそこに好感を持てた。

「良いですよ。どの道、僕達も食材を買って帰らないといけ
ないので、まとめて買えば、安上がりになりますしね」

「安くなるかは分かんないけど、そっちに損は無いわ。もし気が
引けるなら、荷物運びでもしてくれるかしら?」

少年は少し悩む。が、流石に好意を無駄には出来ない様で。

「分かった。すまんが、頼めるか?」

頭を下げてそう言って来た。

「はい。喜んで」

永希は人好きのする笑顔で答え。

「ならさっさと行きましょ?」

華姫はその歩みで答えた。しかし、その歩みを止め、クルリと回
って少年を見ると

「そう言えば、アンタ、名前は?」

そう質問した。少年は。

「ああ、そうだったな。俺は当麻。上条当麻だ」

「「へー!?」」

双子は少年 上条当麻の言葉に目を見開いて驚いた。

「しっかし、零慈の妹に弟だったのか」

夕陽が眩しいくらいの夕方。食材を買った帰り道に三人の人影があった。安く、それでいて質の良い物をまとめ買いしたため、かなりの量になったのを約束通り上条に持たせ、三人は帰路についていた。華姫と永希は彼が『上条』である事に驚いた。同時に、上条は二人が『零慈』の妹弟である事に驚いた。

「僕達も驚きましたよ。兄さんの友人で噂の『上条』さんだったとは」

「……噂つてのが気になるんで教えていただけますでしょうか？」

「『女殺しのフラグマスター』とか、『不幸のマエストロ』とか、『とりあえずモテル奴だから体育館裏呼び出しリストトップ』とか言ってたわね」

「零慈め。後で O H A N A S H I してやる」

上条がそう言ってぶつぶつ言っているのを見て、永希は苦笑した。兄が言った通り面白い人物であるから。

後に、この事件の被害者は語る。

『女の子を怒らせると天国に逝けるぜ』

第八幕とある不幸少年（後書き）

生物「なあ、永希君」

永希「何ですか？」

生物「あの隅っこでぶつぶつ呟いてる華姫さんは何だい？」

永希「ああ。『あのバカはバカで仕方ない。でも・・・』とか言っ
てさっきからああしてますね。詳細は知りません」

生物「女の子って大変なんだね！。さて、最近は特に話題も無いし、
さくさく進めますか」

生物「この小説に目を通してくれた方々に無上の感謝を」

永希「拙い物語ですが、あなたのお気に入りの片隅に入れていただ
ければ幸いです」

生物「感想なんかもどしどしよろしく！！」

生物「さて・・・華姫、どうしよっか？」

永希「ほっときましょう。あれは草津の湯でも治せません」

生物「さいですか」

間幕（前書き）

地元のお菓子でもいかがですか？

（つ）【うなぎパイ】

間幕

reverse side

デスクの設置型PCからの明かりしかない室内。

明りに照らされた室内には様々な資料が所狭しと並べられ、積み上げられている。

その資料は、理解できる者が見れば千金の価値があるだろう。しかし、理解できない者には、狂人が書いた物語にしか見えない。

そんな自室で、博士は調べ物をしていた。

調べているのは、昔の作品の足取り。

しかし、それは数年前からこの学園都市で途絶えていた。

「ん？」

気になる事を見つけた。

それは、秘匿レベルが低く、全てのアンチスキルが閲覧できるデータベースに記録された事件記録。

『もしかしたら』程度の感覚で流し見していた中での発見だった。その名前は知らない名だった。しかし、顔には見覚えがある。

「・・・くく」

口角が上がる。

「くくくく」

自然と笑いがこみ上げる。なぜなら、

二人は笑いながら数人の少年達といる。

「よかったよかった。人として生きてるようつで」

博士は笑みを浮かべ。

「これで壊せるね」

心底うれしそうにそう言った。

間幕（後書き）

生物「あーもう世界なんか滅びれば良いのに」

零慈「いきなり物騒だな。どうした？」

生物「前に北海道で結婚するって言った奴から手紙が届いてな・・・
ご丁寧に結婚式の写真付きで」

零慈「めでたいじゃ・・・すまん、何も言わんからその血涙を止めろ」

生物「ふっ・・・まあ、一辺こつちの実家戻って来るそうだから、
その時に・・・くくくくくく」

零慈「逃げて　！！友人逃げて　！！」

永希「さて、あのバカ二人がじゃれている間に・・・この小説を読んでくれている皆様に無上の感謝を。よろしければ、あなたのお気に入り
の片隅に入れていただければ、幸いです」

華姫「質問、指摘等は随時受付中よ。どしどし送ってね」

華姫&永希「ではまた次回」

生物「幸せクラッシュヤーの降臨だごらあ！！」

零慈「だー！！永希に華姫手伝えて！！」

第九幕 思惑 (前書き)

熱いですね・・・外のバイトでチャーシューになりそうです)
)
)
)

第九幕〜思惑〜

Side 零慈

時間は巻戻り、ここは神鳴宅。その下の勝手に作った地下室の作業室兼練習場。

カーンカーン・・・ジジジ

零慈は広い地下室で『リリア』（アイアンメイデン）を修理していた。

倉庫から引つ張り出した工具箱。そしてホームセンターで買ってきた鉄板と溶接用のガスバーナー。

それらを使い、『リリア』の修理を急ぐ。

「ふう・・・」

顔を覆っていたマスクを取り、汗を拭く。『リリア』の凹みは綺麗に直っていた。が、開かれた胴体の内側が何故か狭くなっている、そこから何本かのコードが伸び、ノートパソコンにつながっている。

「・・・んーやっぱ隠し機能や武装は基本だよな。うん」

そう言っつて、こちらにもコードでノートパソコンと繋がった黄色と黒の縞模様の枠で囲まれた赤いボタンを取り出し。

「起動実験スタート。ぱちっとな」

ボタンを押した。

カシャガシャッ 胴体両側からマシンガンが飛び出る音

カシャカシャカシャ 弾丸が装填される音

ダアアアアアアアアッ！！ 切れ目なく弾丸が発射される音

「・・・やりすぎたかな？」

一応、ターゲットとなるブロック塀を用意してあったが、それは既に瓦礫と化し、跡形も残ってない。

流石にこれは不味いと思うのが普通・・・いや、普通はアイアンメイデンに銃なんか付けないし、そもそも持ってない・・・だが、修理と言つ名の兵器開発を始めてテンションが上がって来た零慈は。

「まあ、大丈夫か。後で弾変えて・・・よし、その次は魔術的に改良すつか。とりあえず陣とルーンを刻んで、二人が帰って来たら更にテレズマ通して・・・」

それからしばらく『リア』の大改造は続き、いつの間にか3時過ぎになっていた

三時を大分回った頃。零慈は、アイスコーヒーと買い置きのカッキーで遅めの休憩をしていた。そんな時。

p i p i p i

固定電話の電子音が鳴り響く。

誰かと表示を見て見れば、寝る前に話題に上がった悪友兼情報屋の土御門元春であった。

急いで通話ボタンを押す。

「はいはい。何か用か土御門？」

そう言っただけで電話に出ると、聞えて来たのは聞きなれた土御門の声。

『レイじん、昨日かみやん家に来たのかにやー？』

「ああ。こつちもそれについて聞きたかったんだが・・・じゃ、いつもの店でいいか？」

『かまわないぜよ。じゃ、30分後にそこで』

それだけ言うと通話が切れた。

「ふう。とりあえず片付けてシャワー浴びて・・・急ぎますかね」

零慈はそこらに転がっている物を軽く片付け、シャワーへと急いだ。

side 土御門

『窓の無いビル』の中。明かりらしい明かりは無いが、辺りには機械の明かりと、宙に浮かぶモニターの光でうつすらと明るい。

そんな室内で、流石に暗いのかサングラスを外した土御門は携帯

をポケットにしまい、後ろの円筒器に満たされた赤い液体の中に逆さまに浮かぶ人物に声をかけた。

「これで良かったのか？」

その人物は緑の手術着を着ていて、聖人にも咎人にも、大人にも子供にも、男にも女にも見える。

そんな人物は中性的な声で答える。

「ああ。問題は無い。彼らの介入により、『アレ』の成長速度は上がる。正確には「そんな事を言っているんじゃない！」

土御門が言葉を遮る。

「俺が言っているのは、事件に関わらせれば、ユダ派がこの学園都市にいるという事がばれるって事だ！！ユダ派は良くも悪くも世界中魔術結社に目を付けられている。それがこの科学サイドの総本山にいる事がばれば、その力を狙うやからやユダ派を消したいやつらが学園都市に大挙して押し寄せて来るぞ！！」

土御門の怒声が部屋に響き渡る。
だが。

「そんな事がどうした」

逆さまに浮かぶ人物は宙に浮かぶモニターを見ながら言った。

「彼らが介入することによって、今回も『アレ』の成長速度は上がる。ならば、今後ユダ派を狙ってやって来る者達も、成長速度を上げてくれるファクターになってもらうだけだ」

ただ無表情に。

ただ無感情に。

その『人』は答えるのだった。

「そんな事より早く行きたまえ。ここから指定場所は遠いから遅れてしまうぞ？」

「ちっ」

土御門は舌打ちして、呼び出されたテレポーターの少女に連れられ外に出る。

外の景色、空気、音、香り。全てのモノがフィルターを通していた『窓の無いビル』から。

世界から忌み嫌われた、魔術師アレクスター・クロウリーの根城から。

土御門は思う

(アレクスター……忌み嫌われ、力を狙われる痛みはお前が一番知ってるはずだろうが……)

一度、『窓の無いビル』を見上げ、その後は振り返らず目的の力フェへと急いだ。

第九幕〜思惑〜（後書き）

零慈「よし！！久々の出番！！」

生物「つつちーに大分盗られたけどねーww」

零慈「つか、俺のキャラってこんななのか？大分マッドだが・・・

」

生物「いやー、ちっと面白いかなーと思ってね。正直、あそこまで

勝手に動くとは・・・」

零慈「まったく・・・精進しろ」

生物「面目ない」

零慈「んじゃ、ちゃっちゃといくか！この小説を読んでくださった皆様に無上の感謝を」

生物「よければ、あなたのお気に入りの片隅に入れてくれると幸いです」

生物&零慈「ではまた次回！」

永希「僕達出番無いね・・・」

華姫「後で作者をメとくわ・・・」

第十幕 ～カフエ【visiopp】～（前書き）

一服中） （ y

第十幕〜カフェ【vision】〜

side 零慈

〜
〜

零慈は、黒のスラックスに白のワイシャツ、大きめの肩掛けカバンという姿でカフェに一人であった。

第七学区の路地裏、その中のボロボロの雑居ビルの地下。小さな看板しか出していない本当に隠れ家的な店。木の扉を開くと、中は落ち着いたカフェ。店内に流れているのはクラシック。店内はさほど広くないが綺麗に清掃され、座る椅子やテーブルは木目が美しく、零慈の前に置かれたカップは、黒地に金の装飾が施された気品漂う物で、コーヒーはこの店オリジナルブレンドで味も香りも良いときている。

全てにおいてこの店のオーナーの趣味とセンスの良さが分かる店だ。

それが気に行つて、零慈はこの店の常連だつたりする。

「ふぁ・・・零ちゃん、めんどいから、早く帰つてくれない？てか帰れ」

「奏？それがオーナーの言うセリフかよ！？相変わらずやる気無いなあおい！？」

カウンターに座つた零慈が奏と呼んだ男。そいつは、髪はぼさぼさ、無精髭を生やし、眠たそうな眼をしていたが、不潔感はない。白のワイシャツにはきっちり糊がしてあり、掛けているエプロンはベージュの下地に黒字で【vision】と書かれている。そんな

不思議な男だった。だがこの男こそ、このカフェ【vision】オーナーの演奏だ。みなとかなで

「ふつ、零ちゃん。俺はいつでもやる気を無くす事にやる気になつてるんだよ」

「簡単に言えば『真面目に不真面目』ってか？お前は何処の児童文学の泥棒だよ？」

零はコーヒーに少量のミルクを入れ、かき混ぜながら突っ込んだ。

「はあ、零ちゃん。俺をあんなのと一緒にするな。俺は、あんなふうにドキドキハラハラする冒険に出るより、自宅でぐーたらしたい人間よ？むしろニートになりたい！働きたくないでござる！！」

「お前はそんな幕末志士になる前に、俺にコーヒー出して働いてるだろうが！？つか、『コッチ側』にいる時点で、一般人にはハラハラドキドキだつっーの！」

そう、奏は『コッチ側』所謂裏側の人間だ。情報屋兼仲介人。それが奏の裏側の顔。

奏は『情報を情報で買う』タイプの情報屋であり、得た情報を元にしての仲介業なんかもしている。

「いやいやー案外のんびりしたもんよ？店はこの通りながら、仲介業もメールで連絡取れば良いし、最近じゃ、ネットゲームを利用して連絡取りあつたりしてるんだよねー。知ってる？案外ネットゲーム内だって、普通にメールや電話するより安全なんよ？何せ、ゲーム内だから、大抵の事はスルーされるし、管理者側は『コッチ側』じ

やないから何言ってるのか分かんないし、不正さえしなければ一般プレイヤーとして見る。プロフィールもでっち上げれるし、キャラクターだからお互い顔も名前も分かんない。後、ゲームも面白いのができる」

「最後の目的だろ」

「いやー、はまっちゃってはまっちゃって。今日も貫徹予定なんよ」

「ちなみに何徹目だ？」

「五徹目かなー？」

「立派な廃人だなwww」

そんな風に奏と話していると。

「わりー、レイじん。遅れたにゃー」

土御門がやってきた。

いつものアロハに金のネックレスにサングラス。見た目完全にチンピラ。明らかに店の雰囲気合わないのだが、土御門もこの店の常連だったりする。と言うか、この店を零慈に教えたのは土御門だ。ちなみに、土御門が零慈をこの店に初めて連れて来た時、奏は。

『げえ。また客が増えた・・・ツツチー、めんどくさいから客増やすなって言っただろー』

などと言っていた。零慈は商売人として・・・いや、人としてダ

メな人だと一瞬で悟った。

「で？ツッチーは何飲む？つか、めんどいからなにも注文しないでくれるとありがたい」

「んー。アイスコーヒー頼むにゃー」

「この・・・注文すんなよ・・・」

ぶつぶつ言いながらも、しっかりと注文のアイスコーヒーを作り始める奏。

手つきは鮮やか。何処でこんな技術を手に入れたか、零慈はそんな事は聞かないし、聞く気も無い。

奏だつて、零慈が『コチラ側』の人間だと知ってからは深くは聞かない。

それはルール

それはマナー

それは命を繋ぐロープ

そして、他者との絶対の境界線

深入りすれば、生き残る確立が減る。それが理解できれば、まずは『コチラ側』での最下層に入れる。

それでも、深入りしようとする者、してしまう者は真っ先に狙われるか巻き込まれて碌でもない事になる。

だが、それでも巻き込まれていき、ハッピーエンドを目指して足掻く者、それがヒーロー（英雄）。

もともと、誰しもが憧れ、挫折し、諦める。そんな存在。

何時から、俺は英雄を諦めた？

不意に、零慈の心にそんな事が浮かんだ。

脈絡のないそんな思考は、案外離れないもので、少し間心の中で
の自問自答を繰り返していると。

「はい、アイスコーヒー。ああ面倒だ・・・面倒だから早く帰っ
てくれないかな？いやマジで」

そんな奏のやる気のない声で思考を中断させられた。

「いやいや、これから話を始めるとこなんだけどにゃー？」

土御門は、アイスコーヒーを受け取るとブラックのままストロー
でチューチューと少し飲み。

「さてレイじん。何から聞きたいかにゃー？」

そう言って、話を切り出した。

第十幕〜カフェ【vision】〜（後書き）

生物「……」

零慈「ん？このチャーシューは……ああ、バイトで猛暑の中を作業したのか。amen……つと、何か紙が。なにに『本日は特別ゲストが！』……嫌な予感しかしない」

????「ふふふふふふ！！」

零慈「誰だ！？」

????「あるときはスパイ、あるときは嘘つき村の住人、あるときは情報屋、またあるときはクラスのムードメーカー。その名は「何してんだよ土御門」

土御門「レイじん！？名乗りでそういうのはマナー違反だぜい！！戦隊物や魔法少女物ですら、名乗りや変身シーンは邪魔しないもんだぜよ！！」

零慈「知るか。つか、誰がムードメーカーだ！？いつつもおでこ委員長に頭突きで沈められてるデルタフォースの一角が！！」

土御門「プラスワンに言われたくないにやー！！」

零慈「にやーにやーとうつつせえ！てめえの語尾がムズイんだよ！！その語尾なくして、ただのチンピラにすっぞ！！」

土御門「作者みたいな事言ってんじゃないぜよ！！つか、今作者乗り移ってたよな！？」（生物をチラリ）

生物（口から魂が出てる）

零慈「OH！？作者のライフはもうゼロだ！！」

土御門「地味にこの小説存亡の危機！？まずい！レイじん！救急車！！救急車！！『冥土帰し』に連絡するぜよ！！」

くしばらくお待ちください」

零慈「作者は運ばれてったな・・・」

土御門「つか、運んでったのは、救急車じゃなくて霊柩車だったにや・・・」

零慈「まあ・・・大丈夫・・・か？」

土御門「多分・・・」

零慈&土御門「・・・」

零慈「まあ、気を取り直して・・・この小説を読んでくれた方々に無上の感謝を」

土御門「お気に入りの片隅にでも入れてくれたら幸いだにや」

零慈&土御門「じゃ、また次回に！good-bye」

土御門「俺、ゲストの意味あつたかにや・・・？」

零慈「・・・今晚付き合っよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6474k/>

とある道化の英雄譚(ヒーローストーリー)

2011年10月6日23時20分発行